

せだかむい

発行・古平町史編纂委員会
編纂・古平町史編纂室
第二十六号 (一日発行)
平成三年十一月一日

明治初期・古平場所の 様子と行政の始まり

近藤 芳一

ここに商人が、場所を請け負った時の証文がある。

茂入(忍路)夏商場証文之事

一、我等支配所茂入夏商場来乙酉年より未甲年迄拾ヶ年之間
其元江相渡候但壹ヶ年ニ小判七拾兩ニ相定申処実正也
右年賦口場所口方ヨリ出入申置候共其元江苦勞ニ相掛申間口
口場所蝦夷共江非分申不口口敷大切ニ商売等可致シ候事
一、公儀御法度大切に相手可候事
一、年々之船差し口指荷油二討入二樽、上連貝式束、干鰯五
束、走り身欠四千人壺本、飯ツシ三ツ差出可申候 以上
右之通相定証文口口口候上相違有間敷者也口而証文如件
宝歴十三年癸未七月廿四日

西川 伝右衛門 殿
代 同 清兵衛 殿
同 卯兵衛 殿

古田 右市 印

この証文の内容を箇条書きに
すると、次のようにまとめるこ
とが出来る。

○西川伝右衛門という商人が、
請け負う期間は十年(1705〜
から1714)

○運上金・一ヶ年小判七十兩
(伝右衛門が古田右市に支払
う金)

○請負人・西川伝右衛門

○知行主・古田右市(松前藩士

・忍路場所の所有者)

請け負う条件として、

●公儀の法度を守ること

●蝦夷人(アイヌ)に非分(非

道)なことはしないこと。

運上金の他に、毎年、次の品

開拓が進むと共に

絶滅していった 狩りモノ・狼

北海道の開拓が進み、牛・馬
・羊などの牧畜が始まると、そ
れまで全道の広い地域に数多く
住んでいた熊や狼は、家畜の外
敵として駆除されていった。

事実、開拓農家や牧場での被
害も大きかったので、明治十年
(一八七七)に開拓使札幌本庁
は、熊や狼を有害鳥獣としてそ
の駆除を奨励した。役所に熊・
狼の両耳を持って行くと、一頭
につき五円の賞金が出たが翌年
には賞金が増額され、戸長の証
印を押した届出書に足四本を添
えて出すと、熊は五円だが狼は
七円貰えた。

を差し出すことを条件として
いる。

★上連貝式束、干鰯五束、走り
身欠四千人壺本、飯ずし三ツ
以上の内容の証文を取り交わし
、西川伝右衛門は十年間忍路場
所を請け負うことになる。他の
場所も商人が請け負った場合に
は、これに似た証文を取り交わ
していたようである。

つづく

明治二十年代になると狼は絶
滅してしまい、山野からその姿
を消してしまった。

アイヌの人たちは熊を『神』
として祭り、狼を『狩りをする
神』として尊敬し、人間との共
存を図ってきたが、開拓が進む
につれて野生動物は次第に消滅
していった。

さかのぼって明治十九年、北
海道庁がおかれた年であるが、
古平で駆除した熊・狼の数は次
のようである。

熊 四頭 手当金 十二円
狼 十四頭 同 百四十円
ハ※ 三ページ下段に続く

「思い出は愉し 今後の人生もまた楽しく」

秋の日ざしの中、あるおばあちゃんと立ち話し。

「あんたは小さいころ、とくべつ元氣のいい子どもだったよねえ——」と、言われた。多分「きつかねえわらすだった」と、言いたかったのだろう？と思つた。

私も、「おばあちゃん、小さいころは可愛かったらうね。今もきれいだけどサ」と、やり

返したら、そのおばあちゃん、はにかむように、嬉しそうに笑つてたつけ。

遠い昔のことを思い出すと面白い切つたこともしたが、考えてみると、多感で情緒的な面もあった。履いている下駄の片一方を前に飛ばして、「あーした天氣になーあれ」とか、虹を見て「あの虹を渡ってみたい」と思つたり、夕焼けの空を見ると、

「夕焼けこやけ」の歌を口ずさんだりしたものだ。

子どもが、赤ん坊を帯で背負つて遊んでいる情景があちこちにあつたし、人と人との温かさというか、ぬくもりがあつた。

隣近所のつきあひも、今より親密だったように思う。あちこちでいも餅だの、南瓜やいもの塩煮など、また季節季節には、べこ餅やおはぎを配つたり、頂いたりといった、良き思い出ばかりが浮かんでくる。

「これも歳のせいかなア？」そう言えばこのごろは、ペロ

故郷を想う 湯井幸平

を垂らしたり、黄色や青っぱなを垂らした子どもは見かけなくなつたもんなあ。

私たちの子どものころは、ほとんどが着物で、パンツもさるまたもはいてなかつた。丸出しが普通だったようだ。

昔の、娘さんならぬおばあちゃんに逢つて、なにかに話している中に、こんな話しになつてしまつた。

七輪で焼いて食べたサンマ、囲炉裏で串刺しにして焼いて食べたにしんの味、これも今ではみんな遠い昔のことか。

このおばあちゃん、今はひと

積丹半島へ鉄道敷設を ——経済不況と震災で一頓挫——

ちようどその年、「未開発地域の鉄道路網の整備を進めるために」、鉄道敷設法が改正されたこともあり、鉄道省による踏査に力を得た期成会では、さらに翌十二年、鉄道敷設の本測量の実施を陳情のため、山口会長、高野副会長、三上町長らが上京した。

そして、翌十三年一月の町会（町議会）で、三上町長は次のような報告をした。

『鉄道期成会同盟会ノ事業ハ着々進捗シ、鉄道省へ第一回請願委員ガ上京シ、同省ヨリ実地踏測量ヲ派遣シ、更ニ融雪期ヲ俟ツテ正式測量ヲ為スノ消息ヲ得タル等、本町前途ノ為祝福ニ堪エザル所トス』

古平町長 三上良知

り暮らしとか——。話しのはしはしに、昔の面影と一抹の寂しさが感じられる。これからも、ご壮健で過ごされるよう祈ります。

ところが、たまたま前年の九月一日、関東大震災に遭い、また折からの戦後の経済不況に襲われ、次第に状況は厳しいものに変わつてきた。まったく予期しない災害と不況に見舞われ、期待は遠のいてしまった。しかし、衆議院・貴族院へは、なおも請願書を提出した。

こうした中で、「見込みが無くなつた鉄道にのみ期待をしないうで、自動車道路の建設を圖つていくべきである。」という意見や、また一方では、古平の経済基盤である鮭漁も、このところ年々漁獲高が減少の傾向にあり、鱈漁など沖合漁業への転換を迫られている。このため「漁港の築設」が急務であるという強い要望もあつた。

筆隨

古 平 一 六

今だから言えること クビの由来 (一)

吉 川 義 雄

復員して来た途端「古平町推進同志会」に加入させられた。十八歳から四十五歳までの男が会員で、青年団とはいささか違う性格の団体であつたように思う。

ちようど、第一回の民選町長の選挙があり、同志会では私の

平坦な道路でも雨が降れば、たちまち大小無数の水たまりが出来てしまう昔の砂利道。ちようど私が一年生になった春、雨上りの夕暮れに、母の使いで父の煙草を買いに出かけました。私は足駄を、妹は低くなつた下駄を履き、手をつないで足許に気をつけながら歩いたのですが、誤つて私が石につまずいてよろめき、固く握っていたはずの五十銭銀貨を落としてしまいました。あわてて妹と探しまし

知らない「爾光尊」とあだ名されていた人を担ぎ、町民の大多数は、当時、漁業会長をしていた大沢吉三郎氏を推していた。戦場帰りの私は張り切っていた。言論の自由を得た者にとつてこれほど楽しいことは無い。劇場での立会演説会では若手の

たが見つからず、そのうち暗くなつたのでござごと家に戻りましたが、母に叱られてしまいました。

翌朝、また探しに行つたのですが見つかることが出来ずに、二人ともがっかりしてしまいました。

当時は五十銭を出すのと、刻み煙草『なでしこ』の四十匁大詰めを

野次將軍と言われ、同志会の幹部から、たしなめられる程の暴れ方をして得意になつていた。選挙の結果は歴然たるもので同志会の完敗であつた。

大沢新町長は、かねてから意中の人であつた伊藤由松氏を呼んで助役に据え、実務をまかせた。大沢町長の眼に狂いは無く、卓見というべきであらう。

私は役場の中で、同志会員であることを理由に、伊藤助役から差別を受けたことは無い。それどころか「判こなんか要らない」式の型破りの事務をやっている私を、随分買つてくれた。しかし、イジイジと私の落ち

一箱買つてもお釣りがきて、父の吸う十日分なのです。そのころ、私の家では鯉の刺網をやつていましたが、漁が年々薄くなり、この春に雇つた若い衆に払う給料を、母がやりくりしていたのを知っていましたから、母に本当にすまないと思ひました。

数日後の良く晴れた

度を探していた、一部の町会議員がいたことを私は知らなかつた。無理も無い、野次將軍の餌食になつた現職議員は結構いたのだから――。

（つづく）

日、その辺りの水たまりに、馬車が浜から砂利を運んで来て埋めていました。

秋になり、雨後の水たまりにとんぼがたくさんやって来て、私は、妹や友だちと一緒にとんぼ捕りをしました。夕方までに五十匹余りも捕り、妹と一匹ずつ尾の先を木綿糸で結んではずなぎ、それを窓の外につるして満足して寝ました。

ところが翌朝、そのとんぼがほとんど死んでゐるのです。その時の驚きは今でも忘れられませんが、とんぼが一列になつて飛んでいるのを見て、糸で結んでつないでしまったのです。考えの無いことをしてしまつたと後悔するばかりでした。

今年もまた秋が来て、裏の畑いっぱい飛んでゐるとんぼを見ると、私は遠い昔の苦い思い出を、今は懐かしく思い浮かべてゐるのです。

道の水たまり

池 田 テ ル

昔懐かしいお祭りの思い出

本 間 銀 朔

お祭りの小遣いを貰ったといつても、

十銭の穴あき錢を三枚も貰えばいい方で、両面に鳳凰の入ったギザ付きの五十錢玉（五十錢ダラといった）なんかはめつたに貰われないので、人形芝居や猿芝居を見たいと思つても、二十錢もとられるのではとても見れない。

猿芝居の小屋では、芸の終わつた猿が、かつらや衣装をつけたまま出て来る。中には三輪車に乗つたのもいる。こんなものを見てから家に帰る。お祭りも終わりになると親にねだつて小遣いを貰い、中に入つて見ることもあつた。人形芝居では、刀で切られると赤い毛糸がそこ

から飛び出して来る。芝居は十分ぐらゐで終わり、お客さんは入れ替えになる。

ある時、電気仕掛けの見せ物小屋がかつた。箱の上から女の人の首だけが出ていて、目がキョロキョロ動いているから生きてゐるのは間違いない。どんな仕掛けがあるのか、体は全く見えないで、さらし首のようだった。これを見るだけで十銭とられ、少々高かつたと思つたが

【今日はこんな日】

新地分校の新校舎落成 統合で一世紀の歴史を閉じる

明治二十一年、新地小学校が創立され、のち古平小学校新地分教場となつたが火災に遭ひ、大正十二年、漁舎の古材を利用して校舎が建設され、群来小学校を統合して、四学級の分教場として開校した。

以来三十余年、建物の床が抜け、玄関の屋根が傾くほどに老朽化し、昭和二十九年、危険校舎に指定されるに及んで新校舎の建設が決まつた。

が見てしまった。

また新地町の道路は屋台でいっぱい、アイスクリームを作つて売っている屋台もあつた。おじさんが、氷を入れた樽の中に、アイスクリームの原料をいれた円筒型のブリキ缶を入れ、蓋をしてそれを手で回す。ときどき塩をかけては、「もうすぐ出来るよ」と言っている。子どもたちは大勢集まつて、珍しうに見ながら待つてゐる。その

明治二十一年、新地小学校が創立され、のち古平小学校新地分教場となつたが火災に遭ひ、大正十二年、漁舎の古材を利用して校舎が建設され、群来小学校を統合して、四学級の分教場として開校した。

以来三十余年、建物の床が抜け、玄関の屋根が傾くほどに老朽化し、昭和二十九年、危険校舎に指定されるに及んで新校舎の建設が決まつた。

うち、おじさんが「お前やつてみれ」などと言う。得意顔でそれを回して手伝わされる。

一時間もかかつてやつと出来る。今のソフトクリームのような容器に、竹べらで山盛りにしたように見せて盛る。「アイスクリン、アイスクリン」言いながら、一個二銭で売つていた。

つづく

△※ 一ページ下段より続く△
（ここでは手当金とあるが、前記の賞金額と一致しない）

この年、狼は後志・道南で四十三頭が駆除されているが、古平での数が意外に多い。

古平に、ホウシエベ（狼の多い所）という古い地名があると、ころをみると、その語源から、狼がかなりいたらしいと思われる。その地名が現在のどこであるかは不明だが、沖町の周辺ではないかと推定される。

明治三十三年、全道での熊の被害として、北海道庁から次のような報告がされている。

人が傷つく 八人
馬が殺された 百九十一頭
牛が殺された 八頭